



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

20周年記念誌・国外

→デジタル版公開ページ <http://www.rirc.or.jp/20th/20th.html>

*印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

現代インドにおける日本宗教の展開

—現地の人びとのかかわり方を中心に—

虫賀幹華

はじめに

1931年に日本山妙法寺が、日本の宗教団体として初めてインドに進出した。第二次世界大戦後は、1970年代以降、複数の団体がインドで活動を始めている。こうした団体の20世紀における活動も重要であるが、本稿では、21世紀に入ってから日本の仏教宗派や宗教教団のインドにおける展開に主眼を置く。

インドにおける日本の宗教団体の活動について、現地の人びとのかかわり方という観点から3つに分類して述べていきたい。

1つ目はネオブuddedhist（新仏教徒）¹⁾たちとかかわることで、仏教への改宗を積極的に援助する団体である。改宗者は主にヒンドゥー教のダリット（被抑圧階級、「不可触民」とも呼ばれる）出身者が多く、彼らへの援助は社会的弱者の救済という意味合いが強い。中部インドマハーラーシュトラ州ナーグプルで活動する佐々井秀嶺、天台宗のサンガラトナ・マナケ、日蓮宗妙海山龍宮寺、南インドでも布教活動を進める臨済宗妙心寺派のボーディ・ダンマが挙げられる。

2つ目は、信者のもとの宗教属性はそのままにして、「思想」として取り入れられる教えを提供している団体である。主に富裕層や高学歴の若者の信者が近年急増している創価学会を代表例とするが、霊友会と幸福の科学についても取り上げる。

3つ目は、インドに「仏法を還す」という信念をもちながら、インド人の仏教改宗には介入しない団体である。信者を増やすことを目的としていない点から、2つ目とも異なる傾向をもつ。日本山妙法寺をはじめ、北インドウッタール・プラデーシュ州サルナートの日蓮宗日月山法輪寺、ビハール州のボードガヤー（ブッダガヤ）で活動する印度山日本寺、大乘教、日蓮宗太生山一心寺、仏心寺がある。サルナートはブッダの初転法輪の地、ボードガヤーは悟りを開いた地とされており、生誕の地ルンビニー（ネパール）、入滅の地クシーナガル（ウッ

タル・プラデーシュ州)とともに、仏教の四大聖地に含まれている。

新仏教徒に関しては、ダリット研究の分野で多くの調査・研究があるが、そのなかで日本の宗教、特に佐々井秀嶺の活動への言及がなされている。日本山妙法寺については歴史的側面を扱う研究がいくつかあるが、現代における展開についての記述はあまりない。それ以外の団体はこれまで研究論文ではほとんど扱われてこなかったようである。本稿は、一つ一つを深く掘り下げるよりも、多くの教団の活動を網羅し比較してみることで、日本の宗教団体の海外活動にみられる現代的傾向を浮かび上がらせることを目指す。とりわけ、インドという条件下でどのような活動形態がとられているか、そしてインドが変わっていくなかでどのような対応がなされているかに焦点を当てる。

文化庁の「海外の宗教事情に関する調査報告書」によれば、インドの宗教団体は各州の「登録事務所 (Registration Office)」に申請し、トラストやソサエティというカテゴリーで登録される²⁾。スポーツクラブや教育機関、病院のような施設・団体と同列に扱われているのである。日本の宗教法人法のような宗教団体にのみ適用される法律はインドにはない(中島 2005: 252)。それゆえ宗教団体の一覧は存在せず、インドで活動する日本の宗教団体をまず特定する必要がある。参照した主な資料は、宗教情報リサーチセンターの「宗教記事データベース」で収集した 80 年代後半から現在までの日本の新聞・雑誌記事、教団機関紙や著作、各団体のウェブサイトである。また、それぞれ短期間ではあるが、ナーグプル、ボードガヤー、サールナート、ニューデリーで行った調査によって得られた情報も用いた。

本稿で言及するインドの地名や人名、団体名はヒンディー語読みで統一した。例えばナーグプルは、マラーティー語では「ナーグプール」となり、日本語の新聞などでは「ナグプール」と表記されることが多いが、本稿では「ナーグプル」とする。ただし、ニューデリーなど通名がより一般的である地名に関してはヒンディー語読みにこだわらず通名を使用した。また、人物や組織の日本語名がヒンディー語読みとずれている場合は、自称を優先した(「パンニャー・メッター・サンガ」とせず「パンニャ・メッタ・サンガ」とするなど)。

1. 中・南部インドにおける積極的「仏教復興」とのかかわり

2011年の国勢調査によればインドの仏教徒は約844万人で人口比では約0.7%に過ぎない³⁾。しかしながら、実際にはその数倍、なかには1億人はいるといふ見方も存在する（読売ウイークリー 2006/12/17 ほか）。仏教はインドで誕生し、マウリヤ朝第3代のアショーカ王統治下（紀元前268年頃～232年頃）など非常に栄えた時代もあったが、徐々に衰退し、ムスリムの侵攻をきっかけに13世紀にはインドからほぼ姿を消したといわれている。これに対して、現代インドにおける仏教徒の多くは20世紀以降にヒンドゥー教から改宗した仏教徒たちである。1956年10月14日、独立インドの初代法務大臣であり、インド憲法の起草者であるB・R・アンベードカルは、ナーグプルで何十万人の



写真1 ディークシャブーミ近くの僧院内の祭壇。ブッダとアンベードカルの数々の写真、肖像画、像が飾られている。

民衆とともにヒンドゥー教から仏教に改宗した。アンベードカルはダリットに分類されるマハール・カーストの出身であり、幼少期からヒンドゥー社会での差別に苦しんできた。マハール・カーストの先祖はアーリヤ人に抵抗したナーガ族であり、彼らの多くが住んでいたのがナーグプルであったという伝説に基づき、改宗の地にナーグプルを選んだ。彼が改宗する際に読み上げた「22 の誓願」は、「今後一切ヒンドゥーの神々を信じない」というヒンドゥー教の否定からはじまっている⁴⁾。

アンベードカルが改宗をした場所は現在、「ディークシャブーミ（改宗広場）」と呼ばれる広い公園となり、2001 年に完成したストゥーパ（仏塔）が立つ。内部には、タイの僧侶が寄進した仏像も安置されているが、中央には小型のストゥーパが設えられている。その下にアンベードカルの遺骨が埋められていることは、アンベードカル自身が新仏教徒たちの崇拜対象であることを象徴しているかのようなのである。新仏教徒たちが通うナーグプル市内の仏教寺院や家庭の祭壇には、必ずブッダとアンベードカル像あるいは写真が並ぶ（写真 1 参照）。アンベードカルが逝去直前に書いた『ブッダとそのダンマ（*The Buddha and His Dhamma*）』は新仏教徒の聖典である。

（1）佐々井秀嶺の活動

インドで活動している日本人宗教者として、佐々井秀嶺はもっとも知られている一人である。「インド仏教徒の頂点に立つ日本人」や「インド仏教の最高指導者」と紹介されることがある。本人にも多くの執筆があるが、新聞や雑誌、あるいは作家、ジャーナリスト、研究者による著作もある。近年はインターネット上にも記事が増えている。佐々井は、1960 年に真言宗智山派の高尾山薬王院で得度したが、さまざまな宗派の寺院での修行経験をもつ。1965 年からタイに留学、その後 1967 年にインドに渡り、唯一の日本の寺院であった日本山妙法寺で修行した。2 年後、日本への帰国を間近にひかえた折に感得した「龍樹菩薩」からのお告げを信じ、一人でナーグプルへ向かった。当時のナーグプルには、寺院もなく僧侶もいなかったという⁵⁾。アンベードカルは改宗の 2 ヶ月後に急死し、指導者を失った新仏教徒の活動は停滞していた。団扇太鼓を片手に「南無妙法蓮華經」を唱えながら街を練り歩く佐々井も、はじめは全く受

け入れられなかった。

しかし、ナーグプル市の仏教協会会長であったサッチダーナンダ・マナケの家に住み始め、仏教徒の家を訪問するようになり、しだいに佐々井に葬儀や結婚式、命名式の執行を頼む人たちも増えていったという。その後の佐々井の奮闘については山際素男の『破天』に詳細に記されている。1988年には百万人の市民の署名によりインド国籍を取得し、2003年から3年間インド政府少数者委員会の仏教徒代表を務めた。「インド仏教徒の最高指導者」という常套句が何を指しているのか定かではないが、新仏教徒の総本山ともいえるディークシャブーミの会長を現在まで務めている。そこで毎年10月に行われる国際仏教徒大会および大改宗式には何十万人という人が他州からも訪れる⁶⁾。

佐々井は日本の特定の仏教宗派を代表しているわけではない。佐々井を支援するために2014年に発足した南天会も、超宗派の僧侶をはじめさまざまな分野の人が賛同人として名を連ねる。佐々井の日本の「宗派仏教」に対する批判的な姿勢は、例えば帰国時に行った高野山での講演における「宗派を起こしてインドの仏教を乱しているのは日本の仏教」との発言（仏教タイムス2015/06/18）などから伺える。佐々井を長年支持・支援している富士玄峰・臨済宗南禅寺派明泉寺先住職は、日本人僧侶のもつ「宗派根性」が、佐々井が日本の仏教界から評価されない理由であるとしている。アンベードカルは仏教が権威ある学者から「本当の仏教ではない」とされたことも影響しているという（アエラ2005/2/21）。

アンベードカルは信徒たちに、「勉強せよ、団結せよ、闘争せよ」と呼びかけた佐々井は筆者に語った⁷⁾。宗派を超えて広く深く学ぶことと団結することに加え、佐々井の活動において「闘争」は一つの大きな柱である。1992年から現在まで佐々井は、ボードガヤーのマハーボーディ寺院（大菩提寺）管理権をヒन्दウ教徒から仏教徒に「返還」するよう求めてきた。十数回にわたる大きなデモ行進を指導し、州・中央政府にかけあい、寺院の管理委員にも名を連ねている。佐々井を原告として、1949年の寺院法改正を要求する裁判が現在でも続いている。佐々井のこの活動を受けて、臨済宗黄檗宗連合各派会議所が2005年4月、仏教徒による寺院の管理を訴える「アピール」を採択した。「佐々井らの運動に対して宗派単位で支援に乗り出したのはこれがはじめて」であっ

た（中外日報 2005/4/21）。

佐々井が精力的に取り組んでいるもう一つの仕事は、ナーグプル県ラームテーク市にあるマンサル遺跡およびチャッティースガル州マハーサムンド県シルプル遺跡の「仏教遺跡としての」発掘調査である。その支援を目的として、真言宗関係者による「大日如来南天鉄塔記念協会」が 2009 年 2 月 14 日に発足している（中外日報 2009/2/28）。

佐々井はナーグプル市内のインドラー寺院を拠点としているが、マンサル遺跡のあるラームテークにも龍樹菩薩大寺を建て、2010 年 10 月 18 日に落慶法要を行った。法要には、岡山県仏教会の会員をはじめ、真言宗御室派の宮本光研・長泉寺名誉住職⁸⁾、富士玄峰・先住職ほか超宗派の僧侶約 20 人を含む約 80 人が日本から参加した。同寺院の地鎮祭は 2005 年 5 月、中村文峰・臨済宗南禅寺派管長が導師を勤めた。1 億円を超す建立資金の大部分は、兵庫県在住の 97 歳の日本人女性の布施でまかなわれたという（中外日報 2010/12/11 ほか）。大尊の阿弥陀如来像に加え、やはりタイから贈られた仏像が 2 体、さらにブッダとアンベードカルの写真が飾られている。伽藍の外には巨大な龍樹菩薩の像が安置され、「龍樹菩薩大寺」と日本語で書かれた石碑が立つ。むろん日本の仏教宗派の寺院ではない。

（2）運動の広がり—天台宗・インド禅定林、臨済宗・印度山曹源寺

「日本の宗教」の活動を扱う本稿で、日本仏教の僧侶として活動しているわけではない佐々井を最初に扱ったのは理由がある⁹⁾。その知名度の高さに加え、彼の活動に賛同し支援している日本の仏教者たちがいることと、これ以後扱う「日本の宗教」の記述に関連する事項が多々あるからである。

佐々井がナーグプルに来た頃、彼を住まわせていた有力仏教徒マナケには、サンガラトナという一人の息子がいた。7 歳のときに日本山妙法寺で得度し、1971 年、9 歳で日本へ渡った。当時、留学生としてインドに 3 年間滞在していた天台宗の堀澤祖門がナーグプルを、そしてマナケ家を訪れ、堀澤、佐々井、両親の間での相談の末、サンガラトナの比叡山留学が決まったという。日本では学校に通いながら、堀澤のもとで 23 歳まで修行をした。1975 年には天台宗の僧侶として再得度している。1982 年に堀澤とともに「日印仏教友好協会」

を結成し、1985年にインドに戻った。

ナーグプル市から南東90kmに位置するバンダーラー県のパウニーという小さな街に、日印仏教友好協会の名で83年に土地が購入されており、サンガラトナはインドに帰国してまもなく寺院の建設にとりかかった。1987年2月8日に「インド禅定林」の落慶法要が行われ、地元の信徒5万人が参加した（京都新聞1987/3/8）。1998年には、チャッティースガル州のドーンガルガルにある智恵山（プラジュニャー・ギリ）に大仏を建立した。毎年の法要には30万人近くが集まる一大聖地となっている（マナケ2007：188）。禅定林は2004年に天台宗寺院として認可され、開創20周年にあたる2007年2月8日には、大本堂の落慶法要が行われた。日本からは約240人が参加し、地元の人びと約20万人とともに大本堂の完成を祝った。本尊釈迦牟尼仏の両脇には、伝教大師とアンベードカルの像が安置されている（中外2007/2/15ほか）（写真2参照）。

禅定林は天台宗寺院であり、サンガラトナも天台宗の僧侶である。彼が代表を務める「パンニャ・メッタ・サンガ（PMS）」を後援しているのは「天台宗一



写真2 天台宗寺院だが、アンベードカルの像は欠かせない。

隅を照らす運動総本部」である（仏教タイムス 2015/9/17）。ただし PMS の活動は、宗教活動にとどまらず、教育や社会福祉、医療活動にまでおよぶ。92 年から禅定林にて子どもを受け入れはじめ、95 年には孤児や貧しい家の子どもを預かるパンニャ・メッタ・子どもの家が設立された。現在までの卒業生は 200 人以上にのぼり、2017 年 2 月にはナーグプル市内に移転された。ナーグプル市内にあるパンニャ・メッタ学園では、1999 年に幼稚園が、2002 年に小学校が、2007 年には中学校がそれぞれ開校した。1995 年には、家庭に学習環境のない学生に場所を提供するためにパウニー市内に図書館を建設した（パンニャ・メッタ会報 2017/6/15）。医療活動法人 AMDA との協力のもと、貧困層の患者に白内障手術を提供している（毎日新聞（大阪）2014/11/5）。「文化時報」に掲載されたサンガラトナという言葉が非常に印象的である。「インドに思想が無いわけではないが信仰 100%ではなく、人々はまず生活全般の改善を求めている。そういう人達の中で布教活動をしており、思想信仰を打ち出すだけでは改善されない。」「子どもの教育や医療活動が布教や信者拡張、力の拡大のための方法、方便であってはいけない。坐禅等は精神的苦悩を、そして子どもの教育や医療活動は肉体的苦悩を払拭するためのものだと考えている」（文化時報 2014/1/1）。

それでもやはり、インドにとっての「仏教復興」あるいは天台宗にとっての「海外開教」のための活動は重視されている。禅定林開創 30 周年および大本堂落慶 10 周年にあたる 2017 年 2 月には、天台宗海外初となる「円頓菩薩戒特別授戒会」が禅定林で開催され、百人のインド人仏教徒が在家得度した（文化時報 2017/9/9）。サンガラトナが大切にしているのは、ヒンドゥーの否定としての仏教ではなく、家族間に伝わる宗教としての仏教でもなく、「自身で選択した宗教として」仏教を受け入れてもらうことである。そのために、禅定林や智恵山で坐禅止観会や研修を行っている。授戒会への参加が認められたのは、こうした研修を経た者だけである。また、2007 年の大本堂落慶法要の時点で、サンガラトナのもとで 150 人の僧侶が修行しているとの報道もあり（仏教タイムス 2007/2/22）、なかには日本で修行を行った者もいる。

改宗仏教徒の両親をもつボーディ・ダンマは、佐々井のもとで得度した。ボードガヤーの印度山日本寺で 2 年間修行し、1986 年に日本に渡る。佐々井の支援者である富士玄峰を介して、外国人修行者を多く迎え入れている臨済宗曹源

寺(岡山県)の原田正道のもとで修行し、妙心寺派の僧籍をとった。1997 年以降、8 月から 11 月までは南インドで坐禅を指導し、日本とインドを往復する生活を送った。ボーディは在家の青年グループである印日国際青年仏教徒会を組織し、各州に支部リーダーを置いた(中外 2001/10/25 ほか)。

2000 年、カルナータカ州ビージャールに印度山一滴寺を建てた。原田が会長を務める「曹源寺菩提心をおこそう会」や曹洞宗関係者からの支援を受け、禅堂や東司、風呂、食堂、ゲストハウスを建設した。寺院内の「禅塾」には、得度することを受け入れの条件として、当時 6 歳から 20 歳まで 45 人の子どもがいた。「般若心経などのお経や通代伝法をローマ字に写し、日本流発音で唱えさせている。坐禅はもちろん食事作法も禅宗式」であった。ボーディは「中外日報」のインタビューに対して、「インドの仏教は宗派を超えた立場ではありますが禅が釈尊の仏教に最も近い。インドの仏教の中に臨済禅をしっかり根付かせたいと思っています。坐禅が基本です」と答えている(中外日報 2008/2/19)。ナーグプルには、禅塾や幼稚園が併設された一滴寺禅堂を建設した。これらで禅を学ばせたあと、日本でも数年の修行をさせ、南インド各地に派遣するという構想をもっていた(中外日報 2005/11/26)。

ボーディは大規模な改宗式を行ってきた。2003 年には、カルナータカ州の州都バンガロールで 15 万人、2004 年にはタミル・ナードゥ州バランバルラ市で 1 万 5 千人規模の改宗式を実現させた(中外日報 2005/11/26)。2009 年当時のボーディのマハーラーシュトラ州を含めた南インド各地での布教の様子や演説の内容については(榎木 2012)が詳しく報告している。ナーグプルに比べて仏教徒の数が少なく僧侶もいない村にも、地域の有力者を介して入っていく歓迎されている様子や、ヒンドゥーに対する強い批判を含む演説が印象的である。ボーディは授戒会と接心を積極的に行い、毎年 8 月には原田が現地を訪問している。2017 年 8 月には授戒会に 8 百人、接心に百人が参加した(中外日報 2017/12/1)。

2016 年 8 月 25 日、中南部テランガーナー州のアディラーバード県に、「インド初の禅寺」とされる印度山曹源寺が完成し、落慶法要が執り行われた。法要には佐々井も出席している。ボーディが日本国内で托鉢した浄財が主な資金源である。原田が初代住職に就任し、開山を同氏の師である山田無文とした。

寺院に設立予定の「禅塾（寄宿舍）」では、貧しい子どもたちを対象に禅の教育を行うことを目的としており（中外日報 2016/9/14）、同じように孤児院や貧困家庭出身の子どもたちに教育を提供しつつも、布教と教育を分けているサンガラトナと対照的である。2016 年 12 月には正式に妙心寺派の寺院として認められ、ボーディが第 2 代住職に就任した（中外日報 2016/12/21）。

（3）龍宮寺と日蓮宗

ナーグプル郊外のカーンプティー市にある妙海山龍宮寺は、地元の人に「ドラゴンパレス」の名で親しまれ、仏教徒以外にも広く知られているという意味で、現在、ディークシャブーミと並んで地元で最も有名な仏教寺院である。会社経営者であり日蓮宗の篤信者の小川法子が、1994 年にナーグプルで出会ったスレーカー・クンバーレーの活動に対して資金援助をはじめたのが寺院の建設のきっかけである。スレーカーは当時、カーンプティー市のビーリー（安い巻き煙草）工場閉鎖により失職した貧しい女性従業員の支援を行っていた。感銘を受けた小川は所持金を全額寄付し、その後、慈善財団法人「オガワ・ソサエティ」を立ち上げ、貧困層の教育や医療のための寄付金を毎年送った。寺院の建設は、「貧しい人を救うにはまずお題目を唱えること。それには核になるお寺が必要」との考えに基づき、恩師である日蓮宗法筵寺の前住職鈴木海仙・妙子（「妙海」山の由来は彼らの名前である）への報恩として行われたという。落慶法要は 1999 年 11 月 23 日、日蓮宗本山比企谷妙本寺の加藤日暉貫首の導師のもと、日本からの日蓮宗関係者約百人に加え、地元の仏教徒ら約 12 万人が参列し、盛大に行われた（中外日報 1999/12/11）。

日本の新聞報道を追うと、日蓮宗側は同寺院を日蓮宗のインド開教拠点であるとみなしていることが分かる。日蓮宗は 90 年代後半から日系人以外にも布教を進める「新地開教」の方針を固めており（仏教タイムス 1999/12/9）、龍宮寺の建設もその流れのなかに位置づけられよう。寺院の落慶 1 周年の折、日蓮宗宗務院から正式に承認を得た。2000 年の報道では、元宗務院国際開教室の教師が数ヶ月に一度日本から龍宮寺に赴き、日蓮宗の指導を行っていたことが報告されている。教師は英語で説明し、地元の通訳がマラーティー語に翻訳しながら、一般信徒も参加する講義を開催したという（仏教タイムス

2000/5/18)。1周年記念法要を前に、寺院の理事長は龍宮寺を「日蓮宗海外開教のモデルケースとしたい」と期待を寄せ、現地人による布教を目指し、『法華経』のマラーティー語訳の準備を進めていると説明した（文化時報 2000/12/16）。3日間続いた1周年記念法要には、延べ20万人が集まった（仏教タイムス 2001/1/1）。

4周年記念法要には10万人が参列し、渡辺照敏宗会議員が地元の子どもたちによる団扇太鼓と題目の大合唱を目の当たりにした感動を伝えている（中外日報 2003/12/11）。「宗教記事データベース」で次に見つかる報道が、2009年の10周年法要についてである。地元の人の参加は3千人で、「法要には現地青少年が団扇太鼓で参加するなど、徐々に教化が進んでいることが実感された」とある。両者を比較すると、地元参加者の数が激減しており、日蓮宗の布教状況にも変化がみられないことが分かる。現在まで毎年年初法要が行われていることは、全国日蓮宗青年会のフェイスブックページなどインターネット上の記事からわかるが、「日蓮宗」が地元根付いている印象は受けない。

龍宮寺の所有地は非常に広い。寺院のある敷地まで来て門をくぐり、管理の行き届いた庭を通り過ぎると、立派な伽藍が現れる。夜にはライトアップされる。正面の階段を上り、ガラス張りの広い本堂に入る。正面中央には、一本の白檀の木に彫られた864kgの仏像が安置されている。日本から送られたものである。このような「美しさ」が、仏教徒に限らず地元の人たちからの評判が良い理由だろう。寺院のほか、豪華なヴィパッサナー瞑想センター（2017年9月22日に開館）、アンベードカル文化研究センター、職業訓練学校（DKMTI）がオガワ・ソサエティの援助によって建てられた。

『破天』の最終章「秀嶺を取り巻く群像」のなかで、スレーカーは「女性弁護士」として紹介されている。1959年生まれの彼女は、弁護士、下院議員、ビーリー産業労働組合の指導者を務めた父親の遺志を継ぎ、26歳で初当選して以来カーンプティー町長を三期務め、幅広く社会福祉活動を行ってきた（山際 2008：580）。1999年から2004年には州の衛生大臣を務めた。2014年の選挙で落選しているが、2019年の選挙での再選を目指している。

寺院に常駐の僧はいない。使用人たちが団扇太鼓を叩きながら朝晩の勤行を行っている。筆者が参加した15分ほどの勤行は、スレーカーの到着後に昼前

に行われたもので、新仏教徒たちが一般的に読誦する「ブッダ・ヴァンダナー」、団扇太鼓を鳴らしての唱題、5分間の瞑想という内容であった。スレーカーが叩いた黒ずんだ団扇太鼓の中央には大きな穴が開いており、彼女の信仰心の強さを物語っていたが、自分たちが信仰しているのはアンベードカルの仏教であると彼女は断言した。仏教はインドで生まれ、チベットや中国、韓国、そして日本まで届き、それぞれの土地でさまざまな形をとるという彼女の発言を受け、筆者が「日本の日蓮宗がインドでどういう形で受け入れられているのかに興味がある」と言うと、「日蓮宗はあなたの国を超えて存続することはない」と答えた。

2. 思想として授受される日本の宗教

前節で扱った少なくとも表向きは社会的弱者を対象にした活動に対して、上層階級にターゲットをしぼり、近年信者数を伸ばしているのがインド創価学会（Bharat Soka Gakkai, BSG）である。そして、ヒンドゥー教から仏教への改宗に関与している前節の仏教宗派とは異なり、創価学会は、個々の宗教属性はそのままに、よりよく生きるための方法を信者に提供している。創価学会のほか、本節では霊友会と幸福の科学のインドでの布教活動についてもまとめる。

（1）創価学会

池田大作がはじめてインドを訪れたのは1961年である。1996年までに訪問した54ヶ国中6番目に早く、仏教発祥の地としてのインドでの布教は、日蓮の「仏法西還」の予言を虚妄にしてはならないと言い残した「戸田先生の悲願」として重視されてきた（『グラフSGI』2005年7月号18頁）。日蓮の予言とは『諫曉八幡鈔』の「天竺国をば、月氏国と申す、仏の出現し給ふべき名なり。扶桑国をば、日本国と申す、豈聖人出で給はざらん。月は西より東に向へり、月氏の仏法、東へ流れるべき相なり。日は東より西へ入る、日本の仏法、月氏へ帰るべき瑞相なり」である。初訪印時に池田はボードガヤーを訪れ、「東洋広布」の石碑を埋めた。その後、75年、79年、92年、97年と訪印を重ねた。1986年1月3日にBSGはソサエティとして登録された。少しずつ会員も増えていったが、日本の新聞記事では、池田とインドの首相など要人との会見や名誉博士

号を含む受賞以外、インドでの布教活動は全く報じられなかった。

1999 年から現在までの『グラフ SGI』で、BSG の活動状況がはじめて詳しく扱われたのは 2005 年 7 月号である。その後、会員インタビューなどが載るようになる。ランジャナ・ムコパディヤーヤは、1980 年代後半からの BSG 会員数の急伸の背景について、「近年のインドの急速な経済成長とその担い手になっている中産階級の勃興がある」と分析した（ムコパディヤーヤ 2007：897-898）。

ムコパディヤーヤが調査対象とした 1985 年から 2007 年頃までと比べても、その後 10 年間、会員数は激増している。BSG 会員の試験¹⁰⁾の参考書に掲載される「BSG の歴史」によれば、1997 年に 4 千人であった会員が 2002 年までに 1 万人となり、さらに 2011 年までに 5 万人に増えた。2014 年から 2016 年を「BSG の新時代の幕開け」と述べ、2015 年 8 月 1 日に会員が 10 万人を超えたことで、この日を BSG Trailblazer Day とした。同年 11 月 18 日に会員 11,111 人を達成し、さらに 2016 年 8 月 1 日には会員 15 万人となった(Bharat Soka Gakkai 2017：41-48)。『グラフ SGI』では、2014 年 3 月号および 2016 年 3 月号でも BSG 特集が組まれた。2015 年 12 月 16 日付の「中外日報」は BSG について、「ここ数年、インテリ層、社会的身分の比較的高い青年世代を中心に急速に教勢を拡大している」と報じた¹¹⁾。

BSG が大都市の中上層階級にターゲットを絞っていることは、関連書籍がヒンディー語などインドの諸言語ではなくほとんど英訳でしか提供されていないことから分かる。ムコパディヤーヤによれば、布教の形態は知人による紹介が主であるため、同様な社会的経済的背景と地縁関係をもつ人びとが入会している。なおインドでは、十分な英語教育は中上層階級に属するための必要条件である。

2011 年 1 月、1993 年にニューデリー近郊に開園した創価菩提樹園に池田の訪印 50 周年を記念して「世界平和の碑」が設置され、2015 年 11 月 29 日にボードガヤーから創価菩提樹園へ、「東洋広布」碑が移転された。これは、インド最貧州の田舎にある仏教聖地ボードガヤーから首都ニューデリーへと布教の中心地が完全に移ったことを象徴しているようである。現在はニューデリーに本部があり、コルカタ（カルカッタ）（西ベンガル州）、ムンバイ（マハーラーシュ

トラ州)、バンガロール (カルナータカ州)、チェンナイ (タミル・ナードゥ州) といったインドを代表する大都市に支部がある。

前述した試験の参考書はまず、題目と「御本尊」について説明する。「南無妙法蓮華経は永遠なる法であり、御本尊はその視覚的表現である」(Bharat Soka Gakkai 2017:4)。そして、日蓮仏教の3つの柱として、信仰、実践、学習 (faith, practice, study) を挙げる。御本尊と日蓮大聖人の教えの力を信じるのが最重要で(信仰)、題目を唱え、朝夕の勤行を行い、またこれを他人に教え(実践)、「御書を読み、我々の師 (mentor) である池田大作の著作、エッセイ、講演を読むことによって、日蓮仏教哲学を理解すること」(前掲書:6) (学習) が信者のつとめとされる。御本尊(題目が墨で書かれた紙)は日本から運ばれ、地区ごとに御本尊の授与式が定期的に行われる。御本尊を設置する仏壇は6千ルピー(約1万円)代から売られている(写真3参照)。『グラフSGI』には、地区単位の小規模な、成功体験を共有したり勉強したりする会合の様子が多く報告されている。BSGのウェブサイトは、毎年行われる大規模なシンポジウムや各地での展示会の様子を伝える。

BSGのナビーナ・レディ理事長は「クーリエ・ジャポン」の取材で、「BSGの仏教は一種の思想ですから、改宗も強制されません。私たちの教義はどの宗教の教えにも抵触しませんし、仏教徒にならずして仏教を実践し、究極の幸せを得ることを目的としているのです」と述べた。多くのインド人がBSGに惹かれるのはなぜかという問いに対して彼女は、「BSGの教えが実際の生活で役に立つからです。具体的な方法で自分自身を向上させることができますし、自分の内面が変わることで、周りまでいい方向に向けることができるのです」と答えた(クーリエ・ジャポン 2009/3/1)。



筆者は、2018年2月にBSGの出版部

写真3 仏壇は、エターナル・ガンジスの書店でも販売されている。

門であるエターナル・ガンジスの書店を訪れ、BSG 会員でもある女性店員と話をする機会を得た。夫に勧められて BSG に入会した（すなわち結婚は会員同士で行われるわけではない）彼女は、自身をヒンドゥーであると答えた。BSG の信仰は非常に個人的なものであり、ヒンドゥー教は公のもの、社会とのかかわり方であるとした。彼女には、BSG の月刊機関紙 *Value Creation*（2006 年 1 月創刊）掲載の体験談を読むことを勧められた。BSG の教えを取り入れることで、お金など煩わしいことはすべて忘れて心の平静を得られるが、結果的に、金銭的にも豊かにもなれるのだと述べた。

(2) 霊友会

1976 年にニューデリーではじめて集会を開き、翌年にインド支部を立ち上げた霊友会は、BSG よりも早い 1983 年に「Adhyatmic Sahcharya Sanstha (ASS, 「霊友会」のヒンディー語訳)」という名前で正式に登録された。1979 年に『青経巻』（法華三部経からの抜粋で構成された経巻）のヒンディー語訳とインド版英訳が、2009 年にタミル語訳が出版された。現在までにベンガル語訳も出版され、マラーティー語訳も出版間近である。1993 年から 2014 年まで発行された機関紙も英語・ヒンディー語・ベンガル語版がある。ウェブサイトは英語版に加えてヒンディー語版もある。信者の英語能力で「足きり」を設けている BSG と比べると布教対象のすそ野が広いように見受けられる。

現在、ニューデリーにインド支部の事務局を置き、他にジャールカンド州のボーカロー（1989 年設立）およびウッタール・プラデーシュ州のファッルーカールバード（1998 年設立）に事務所がある。2000 年代までビハール州ガヤーにも事務所があった。BSG が大都市を中心に展開しているのに対し、ASS は小規模な街に事務所を置いているのも特徴である。ただし小さな拠点は他に数十か所あり、ベンガル語やマラーティー語の経典が準備されるのはコルカタやムンバイに信者が多いためである。30 年前から ASS の会員であるデリー事務局のインド人マネージャーは、デリーとその近郊で 3～4 千人、インド全土で 2 万人ほど信者がいると見積もった。

BSG と同じく、ASS も改宗を必要としない（仏教タイムス 1999/6/17）。デリー事務局のマネージャーは、ASS の信者は仏教を「宗教（ダルマ）」として受け入

れるわけではなく、ブッダの教えを取り入れているとした。彼および彼の家族は、ヒンドゥー教徒でもあり、霊友会の会員でもあるという。機関紙で紹介された会員の言葉に次のような文言があった。「すべての人、すなわちどのカーストに属する人も、どの国の人も、[霊友会が依拠している] ブッダの道から教えを得ることができる。ウルドゥー語を学ぶ人がムスリムにならず、パンジャービー語を学ぶ人がシク教徒にならないように、真実を提供するブッダの教えを実践する者はそれから利益を得る。ブッダの教えを知ることは、人類に安寧をもたらすのである」(We are One 第 16 巻 1 号 9 頁)。

デリー事務局のマネージャーは、霊友会の目標は「世界平和」であり、その実現のために信者は先祖供養と「導き」を行うとした。彼は毎日、正座してヒンディー語版『青経巻』を音読し、先祖のために水を供えている。「導き」とは他人に霊友会の教えを伝えることである。家族、友人知人に教えを少しずつ広めていき、月に一度ほど開催される地域ごとの会合で経験の共有を行う。インド全土の集会はなく、大々的に宣伝を行うこともない。ウェブサイトによれば ASS は、無料の医療サービスの提供や献血などの社会福祉活動、運動会、スピーチや作文コンテスト、日本語教室を開催している。マネージャーは、そうした活動の際に霊友会の教えも伝えるが、現在はインド政府の法律改正により日本からインドへの送金が難しくなり、社会福祉活動は行っていないと説明した。運営資金は会員からの年会費(120 ルピー (約 190 円))のみであるという。

仏教聖地サルナートの重要な巡礼・観光地であるチャウカンディー・ストゥーパの裏には、Spiritual Garden of Wisdom という名の広い公園がある。責任者代理として公園内の建物に居住している若い男性は霊友会の信者で、「南無妙法蓮華經」と書かれた大きな碑も立っている。彼によれば、毎年 11 月 18 日に霊友会の法要が執り行われ、公園内には日本からの来賓が宿泊することのできる部屋もある。「苦から逃れる方法」が書かれた看板群や、四諦八正道を説明する風変わりな岩のモニュメントが建てられた「スピリチュアル・ガーデン」であるが、霊友会との関係は全く示されていない。管理人はこの公園の目的は、観光事業の促進、仏教の知識および瞑想の場の提供であるとした。ただしデリー事務局のマネージャーによれば、ASS とは関係のない施設とのことである。

(3) 幸福の科学

幸福の科学の海外展開は 1994 年 1 月から開始され、インドに支部ができはじめたのは 2009 年である。2011 年には、ニューデリー、ムンバイ、ボードガヤー、ネパールの首都カトマンドウ（カトマンズ）で大川隆法が講演を行った。3 都市での聴衆はそれぞれ千～2 千人であったが、ボードガヤーでの講演には約 4 万人が集まったと報告された¹²⁾。現在南アジアでは、ニューデリー、ボードガヤー、コルカタ、ムンバイ、アウランガーバード（マハーラーシュトラ州）、チェンナイ、カトマンドウ、そしてスリランカの大都市コロombo に支部がある。教団の日本語ウェブサイトの「海外ニュース」によると、2012 年から 2016 年にかけて計 18 回、インド各地のブックフェアで書籍販売が行われた¹³⁾。英語書籍はもちろん、ヒンディー語、ベンガル語、グジャラーティー語、マラーティー語、カンナダ語、タミル語といったインド諸言語への翻訳も活発に行われている。信者のための経本「正心法語(Dharma of the Right Mind)」、「祈願文①(Prayers Book I)」、「祈願文②(Prayers Book II)」には英語版とヒンディー語版がある。

幸福の科学もまた、信者に改宗を要求しない。例えばヒンドゥー教徒ならヒンドゥー教徒のままで、幸福の科学の教えを好きなように取り入れ、祈りに「精舎」を訪れば良いという。筆者が訪問したボードガヤー支部は、広い部屋にエル・カンターレ像やチャクラ（輪）の彫像が飾られていた。支部では朝 9 時半と夕方 5 時半、毎日祈りがささげられている（写真 4 参照）。朝には先の経本を英語で読み、夕方にはヒンディー語で「エル・カンターレへの祈り」が唱えられる。筆者が訪問した際の夕方の祈りは、ボードガヤー支部のマネージャーを務めるインド人職員によって先導された。彼は、日本で幸福の科学のトレーニングを受けた体験を、写真を見せながら筆者に語った。海外で獲得した信者を次は指導者として育成するシステムが成立しているようである¹⁴⁾。

一つの教団とはいえ、地域の状況に応じてさまざまな形態で布教されている。南アジア地域布教を統括している男性職員は、自身の活動拠点であるムンバイでは知り合いの紹介を通して学校や会社などで英語のセミナーを行い、信者を獲得すると説明した。これに対してボードガヤー支部では、貧困家庭の子どもを対象とした無償の学校で、授業の一環として幸福の科学の教えが取り入れら



写真4 幸福の科学ボードガヤー支部での祈り（写真は支部より提供）

れている。幸福の科学南アジア本部職員の女性は、インド人の夫とともにボードガヤーでホテル経営をする傍ら、2001年にスーリヤ・バールティール・スクールを立ち上げた。2006年以降幸福の科学から（2013年12月以降は「HS・ネルソン・マンデラ基金」から）支援を受けるようになり、給食を毎日出せたりスクールバスを走らせたりなど状況が良くなったという。彼女によれば、2007年から週に1回、幸福の科学の教えを学校で自ら教えるようになった。現在は週2回、幸福の科学の信者でもある学校の教員が生徒に教えている。授業内容を定着させる目的で、授業の最後に瞑想する時間がある。現在、1年生から10年生までの約350人の生徒が学び、教員は卒業生も含め18人ほどいる。スーリヤ・バールティール・スクールの教員、卒業生、学生のなかには、ボードガヤー支部の祈りに参加したり、支部で開催される日本語教室に来る者もいる。教団のウェブサイトでは、同校の卒業生2人について、2017年に短い記事が書かれている。2人とも幸福の科学の教えを大切にしていることが書かれ、そのうちの1人は、大学の下宿で友人に幸福の科学について話したり、ボードガヤーで学生部の布教活動に参加しているとのことである¹⁵⁾。

ボードガヤー近郊の村に大きな精舎の建設計画が進んでいる。2011年3月

6 日に大川隆法の講演があり、その年の暮れの 12 月 28 日、精舎建立祈念堂の竣工式およびインド亜大陸では初めてのエル・カンターレ像の安置式が挙行された。式典には約 3 千人が参加したという¹⁶⁾。2018 年現在、精舎建立の第 1 段階が完成し、支部精舎兼参拝所が建立されている。付近に菩提樹を植えメディテーション・パークを建設する計画もある。

以下は、その他教団のインドでの活動に関する簡単な情報提供である。宗教真光は現在、ムンバイに道場をもち、他にニューデリー、チェンナイ、ケーララ州の州都ティルヴァナンタプラム、コーチ、コーツラムなど全国に 9 ケ所の拠点および仮拠点を含めた 30 ケ所以上で布教活動をしている。1986 年にムンバイ市の日本領事館の副領事が自宅に「御神体」を設置し「お浄め会」を始めたのが最初であるという。1988 年に連絡所、2001 年にはお浄め所として認められるようになった。各地への布教活動が始められ、ムンバイ拠点は 2006 年に準道場、2009 年に小道場、2017 年に中道場へと昇格した（『宗教真光』2018 年 5 月 668 号 70-72 頁）。

立正佼成会は現在、少なくともニューデリー、コルカタ、ボードガヤーに支部をもつ。ウェブサイトの海外ニュース・アーカイヴで 2012 年から現在までの情報を閲覧することができる¹⁷⁾。日本人が支部で布教の指導や意見交換をした様子や、Family Education に関するセミナーの開催が報告されている。

日蓮正宗妙観講は「仏法西還」をめざし、インドおよびネパールでの活動をしている。ここ数年で約 5 万 5 千人が「講員」となったという。2015 年 4 月のネパール大地震の際に現地で支援を行ったことで、布教活動も活発化した（仏教タイムス 2016/5/12）。妙観講のウェブサイトによれば、インドよりもネパールで布教が進んでいるようである¹⁸⁾。

3. 「仏法」を還す—もう一つの「仏教復興」

創価学会がインド布教の根拠にした日蓮の言葉は、日蓮宗および日蓮宗系教団もインド進出の動機として重視している。日本の宗教教団としては最初にインドに進出した日本山妙法寺の開祖、藤井日達は、次のようにインド布教の動機を語った。

「もし西天にこの法還らずば、高祖〔日蓮〕の予言地に墜ちなん。もし西天にこの法還らずば、我等が菩薩行立つべからず。もし西天にこの法還らずば、娑婆の衆生は永く火刀血の牢舎を出づる期あるべからず。されば諸天善神王、忝くも高祖大士の本懷を援けて、我等が修行を衛らせ給へ。」(『天鼓』2007年12月号、8頁)¹⁹⁾

日本山のインドでの布教形態は、これまでみてきた現代の仏教宗派や教団の活動と異なるものである。西天(インド)に「法を還す」として、彼らがインド人とのかわりにおいて具体的に何をしてきたのか、見えにくい²⁰⁾。ただ、日本山のインド布教にみられるこうした傾向は、他の仏教宗派・教団のインドでの活動にも確認できる(写真5、6参照)。彼らにとっては何をもって「仏法が還った」といえるのだろうか。

(1) 日本山妙法寺

日本山妙法寺は1918年、藤井日達(にったつ)が満州の遼陽に創設した日蓮宗系の仏教教団である。外川昌彦によれば、近代日本仏教の大陸での活動が概して入植した在留邦人を対象として行われたのに対し、日本山妙法寺の場合は現地の人びとへの布教を行ったことが特筆される。つまり当時の仏教僧にとって仏跡探訪のために訪れるくらいであったインドを布教の対象地(「西天開教」として重視したのである(外川2015:3)。日蓮の予言のほか、インドの独立を「非暴力」によって成し遂げたM・K・ガーンディーの思想との共鳴も「西天開教」の大きな機動力となった²¹⁾。

藤井は1930年9月に神戸港から出発し、1931年1月にコルカタに着いた。団扇太鼓を叩きながら題目を唱えてコルカタの街を練り歩いたが、支援者はおらず、日本領事館からも苦情が寄せられ、日本山の信者がいたムンバイへ移った。1932年、邦人用火葬場の一角に建てた草庵が、インドで最初の日本山の道場となった。1933年にワルダー(マハーラーシュトラ州)でガーンディーと会見したことでインドでも徐々に認知され始め²²⁾、1935年にはビルラー財閥から資金援助を得てコルカタに道場を建てた。さらにビルラーを通じて、藤井とその弟子たちは政治団体の指導者らとも交流するようになっていく。1936



三つめに分類される団体の寺院は概して日本風である。
写真5（上）は日本山妙法寺デリー道場、写真6（下）は日月山法輪寺。

年には、『法華經』が説かれた場所として藤井が重視したビハール州ラージギルの道場、仏舍利塔の建設に着手した。1956年、仏滅後2500年を祝う祭典をインド政府が主催し、藤井が招待された。そこで初代首相ジャワハルラール・ネルーと会談、仏教復興の構想を伝え、支援の約束をとりつけた。ネルーを委員長とし、当時の大蔵大臣、ビハール州首相、駐日大使、藤井が委員となったラージギル復興委員会が発足した。当初はビハール政府が仏舍利塔を建設する予定であったが、飢饉の発生により不可能になり、藤井は日本山の弟子を総動員して建設を進める決意をした。紆余曲折を経て1969年にラージギルの仏舍利塔は完成し、日本山のインドでの活動は軌道に乗る。

日本山は「布教」といってもインド人を他宗教から仏教に改宗させることは目的としていない。むしろアンベードカルの仏教やヒンドゥーからの改宗を主とする現代インドの新仏教徒、さらにそれを支援する日本人宗教者の活動に否定的である。藤井は1983年10月末、ラージギル道場にて「日本山はインドにおいて新仏教徒を絶縁しました」と宣言した(『天鼓』2006年12月号45頁²³⁾。藤井の言葉そのものを聖典とする弟子たちが²⁴⁾、アンベードカルに追随する「仏教復興」を支持するはずがない²⁵⁾。インド人の日本山出家者や信者もいないわけではないが、その数を増やすことが目的ではない。

山折哲雄によれば、藤井は、「官僚主義的な教団布教によっては現地人の心をとらえることもその救済を果たすこともできないのであって、ただ無私無欲の祈念と礼拝の修行によって撃鼓唱題することのなかに、おのずから仏法の興隆が可能になる」と考えていたという。そして、「最低水準ぎりぎりの衣食住の生活のなかで、一人自立的な行乞をつらぬくことにこそ仏法を行ずることの原点があるとの確信をもっていた」(山折 1973: 7-8)。

デリー道場の堀内庵主と北尾庵主は、筆者との会話のなかで、日本山には「本部」や「支部」という考え方はないと述べた。藤井の教えを学び修行を積み、究極的には「道場」に建物は必要なく、一人でもどこでも、団扇太鼓を持って題目を唱え、布教活動ができる。(第1節で扱った佐々井のナグプル到着後の活動は、日本山の布教様式そのものであるようにもみえる。)日本山の共通の規則は、朝晩の勤行は欠かさず行い、12月1日から1週間の断食を行うことである。両庵主によると、藤井は行脚を非常に重視していた。撃鼓唱題して

歩き回り、題目の響きを森羅万象のすみずみに届けることによって平和をもたらすのだと、本気で信じていた。釈迦の慈悲が閉じ込められている題目は、それだけで世を救うことのできる力をもつ「お薬」である、と。

日本山にとって教団や建物は重要ではないが、仏舍利塔（平和記念塔）の建設には精力的にとりくんでいる。現在までにインドでは次の8つの場所に仏舍利塔が建てられた（括弧内の年は落慶法要が行われた年を表す）。：ラージギル（1969年）、カリंगा（オリッサ州、1972年）、ラダック（ジャンムー・カシミール州、1991年）²⁶、ダージリン（西ベンガル州、1992年）、ワルダー（1993年）、ヴァイシャーリー（ビハール州、1996年）、ニューデリー（2007年）、サンカラランコーヴィル（タミル・ナードゥ州、建設中）。ビハール州の州都パトナーの駅前の公園内に立つストゥーパは、州政府により2010年に建設されたが、スリランカ、タイ、ミャンマー、韓国からの代表に混じり、日本の代表として仏舍利を提供したのは日本山であった（『天鼓』2010年7・8月号58頁）。塔はないが、前述のようにコルカタやムンバイには古くから道場があり、少なくともマドゥライ（タミル・ナードゥ州）、マナーリー（ヒマーチャル・プラデーシュ州）、アヨーディヤー（ウッタル・プラデーシュ州）で日本山の上人が活動している。

82歳の堀内庵主は、長年藤井から直々に教えを受け取った。「デリーとインドを目覚めさせ世界平和を実現させるために、太鼓を叩き題目を唱え続けよ」という藤井の指示に従い、藤井の死後、彼の悲願であったデリーの仏舍利塔建立に力を尽くした。1985年に誓願を立ててから20年間、一日も休まず、ニューデリー市内の寄宿からヤムナー河畔のガーンディー廟まで撃鼓唱題しながら往復した。彼女がインド国籍を取得したあと、2004年に公団所有地を無償で与えられ、政府直轄の開発公団DDA（Delhi Development Authority）主導で仏舍利塔の建設が行われた（『天鼓』2007年12月号73頁）。混迷する大都市デリーで静かに祈る場所が欲しいと、塔の建設は州首相自身が希望したのだという。現在、仏舍利塔の近くに「平和館」として原爆資料館と本堂を建設中である。堀内庵主は、法が還るということは、仏法僧すなわち仏舍利塔、法華経を安置する場所（本堂）、僧侶の3つがそろうことであり、デリーではそれが実現しつつあると述べた。

サンカランコーヴィルの仏舎利塔は、レンガを一つ一つ積み上げながら長い時間をかけて建設をすすめている。日本山の機関紙『天鼓』にはサンカランコーヴィル道場からの報告が定期的に掲載されている。地元の複数の学校が教育の一環としてバスで学生を連れて来て建設の手助けをしている。毎年の広島・長崎の日に原爆写真パネルを持って学校を訪ね、平和を祈り撃鼓唱題してきたが、その学校の生徒たちが寺に来るようになったという（『天鼓』2014年2・3月号）。デリー道場でも、夕方に若いインド人の男の子2人が2年ほど前から通っているのを確認した。彼らはヒन्दウ教徒であった。仏舎利塔で堀内・北尾両庵主が勤行しているときに会い、話をして以来の付き合いで、法要の手伝いにも来ているという。

『天鼓』で報告されているインドでの活動としては他に、平和行進がある。2012年2月から3月の2週間、ゴーラクプル（ウツタル・プラデーシュ州）原発予定地からニューデリーのガンディー廟まで約3百kmの平和行進を行った。通し行者は5人だけであったが、村々をめぐり、学校、公共施設などで人びとと交流した（『天鼓』2012年2・3月号57頁）。2007年10月には、約1ヶ月間かけて、グワーリヤル（マディヤ・プラデーシュ州）からニューデリーのラージガートまでを2万5千人（最終的には1万5千人）が土地の所有権を主張して行進した（『天鼓』2008年2・3月号50頁）。

（2）仏教聖地における日本仏教の活動

日本山妙法寺と同様に、インド人の改宗を積極的に後押しすることなしに「仏教復興」を目指す仏教宗派や組織は、現在は閉鎖になったものも含め、サルナート、ボードガヤー、クシーナガルに複数存在する。ただし、日本山は金銭を必要とする貧困層への援助をしないのに対し、次に挙げる機関は教育・医療面での支援もしている。むしろ、支援が活動の中心である組織も多い。

サルナートにある日月山法輪寺は、佐々木鳳定・妙定が創設した日蓮宗の寺院である。彼らがインドを訪れたのは1967年で、『諫曉八幡鈔』の日蓮の言葉を受けてインドに「お題目の道場」を建立しようと発願し、日本・インドの各地で浄財募金を行った。日蓮宗の支援も受けながら、1992年11月に本堂と庫裡が完成、1997年にはアジアで初の日蓮宗寺院として承認された。2003年

以降第2期工事がすすめられ、2010年11月25日には仏舎利塔の落慶法要が行われた。医療施設も現在までに完成したとのことである。鳳定は2003年に、妙定は2017年8月に亡くなり、娘の妙實が寺を継いだ。現在は妙實とともに、本堂完成当初から法輪寺に居住しているラダック出身の男性とその妻が寺院運営を手伝っている。他に、親に預けられた2人の男の子が住んでおり、朝晩の勤行をはじめ寺院の雑用を行う。

寺院内の宿泊施設には日本人以外も泊まりに来る。朝晩の勤行に参加するなど規則はあるが、食事付きで布施の額に決まりはない。妙實は父鳳定の教えであるとして、「人種や宗派を超えた学びの場を提供したい」と述べた。彼女の考える「仏教復興」は、インド人の仏教徒を増やすことではない。「仏教の教えを少しずつ広めていき、人びとの心に平静を与えることができればと。日本は仏教国として発展することができた。その恩をインドにお返ししたい。改宗という形をとるのではなく、もっと精神的な教化をしたい。ヒンドゥーであれムスリムであれ関係ない。」

鳳定は日本山とも関係をもっていた。仏舎利塔の落慶法要には日本山の僧侶も参詣し、写真が『天鼓』に掲載されている（『天鼓』2011年6月号）。法輪寺にも題目が書かれた大きな太鼓と団扇太鼓があり、朝晩の勤行での唱題の仕方日本山と同じである。妙實によれば、妙定は日本山の出家者のように太鼓をもって行脚もしたという。法輪寺の仏壇には藤井日達の写真も飾られている。鳳定、佐々井秀嶺、デリー道場の堀内庵主は日本山での修行仲間であった。日本山は、インドで活動する日本人宗教者たちをつなぐ役割も果たしてきたように思われる。鳳定が亡くなった際には、天台宗の堀澤祖門が『天鼓』に追悼文をよせている（『天鼓』2003年4月52頁）。佐々木、堀澤、佐々井はラージギルの仏舎利塔建設の際にともに汗を流した。現在は、堀澤の弟子であるサンガラトナが、法輪寺の理事を務めている。天台宗のサンガラトナと堀内は得度兄弟である。サンガラトナはデリーに行くたびに日本山デリー道場を訪問しているという。

サルナートには、後藤恵照が1979年に建立した「サルナート法輪精舎」もあった。彼は曹洞宗の出身であるが、1978年にベンガル仏教会にて再得度し、インド国籍であった。貧しい地元の子どものために無料の日曜学校を開き、

学用品や軽食を施し、仏教や英語を教えていた。古着の配布、医療費の援助なども行っていたが（中外日報 2008/4/19）、2013 年 3 月に閉鎖された。後藤は 2016 年 11 月 23 日に亡くなった。

日蓮宗寺院では、ボードガヤーに 2003 年に完成した太生山一心寺がある。岡山市に本院がある。やはり『諫曉八幡鈔』の日蓮の言葉、それを実行しようとしたが叶わなかった日蓮の弟子の日持上人（1250-1296?）の遺志を継ぐとして、中島妙江がボードガヤーにインド分院を建設した。2009 年 11 月に、隣接する AMDA ピースクリニックとともに、開所式が行われた。パンフレットによれば同寺院は、「インドの皆様が幸せであるようにという祈りを込めて『南無妙法蓮華経』のお題目をあげて」いる。中島は現在日本におり、その弟子である若い尼僧が常駐している。彼女によれば、一心寺は改宗を目的としていない。法華経の教えを取り入れ、インドの人びとが幸せになることが目標なのだという。ボードガヤーで仏教への改宗者は村八分になってしまうだろう。それは「幸せ」とは反対である。

ボードガヤーには他に、印度山日本寺、大乘教インド別院、仏心寺がある。超宗派の公益財団法人国際仏教興隆協会が運営する印度山日本寺は、1973 年に本堂が落慶した。1956 年に当時のインド首相ネルーがボードガヤーを国際的な平和都市にすることを提唱し各国に呼びかけを行ったが、日本政府は要請に応じられなかった。ボードガヤーに日本の寺院を創設することについて日本仏教諸宗派・寺派、諸団体、さらに学界、財界、民間が賛同・協力して組織を結成、68 年には文部大臣による財団法人設立認可に至った²⁷⁾。広い敷地に立派な日本式の伽藍を構え、大きな鐘も設置されている。ウェブサイトに掲載される活動内容では、第一に地元の貧しい子どもの教育が挙げられ、続いて無料医療施設、学術研究事業、各国仏教寺との交流、巡礼者への情報提供や保護がある。寺院内にある菩提樹学園は現在でも機能しているが、光明施療院は閉鎖中である。活動内容に布教は挙げられていない。1987 年から勤務するインド人スタッフは、改宗は行っていないと断言した。彼はまた、布施が減っており資金繰りが困難になっていると嘆いていた。

大乘教「宣教師」のインド派遣が開始されたのは 1977 年である。83 年に釈迦堂、85 年に職業訓練学校（タイピング、ミシン教室）、88 年にブッディ

ストハウス（宿泊所）、89年に大仏の開眼式、98年に近郊の村に学校を建設、2000年に別の村に無料の医療品配布所を開設、2001年に教祖像が建立された。「80 フィート・ブッダ」と呼ばれる大仏はボードガヤーの一大観光地になっており、訪れる人は非常に多い。パンフレットによると、ボードガヤーに別院を建て活動している理由として、インドが仏教発祥の地であること、ボードガヤーが仏教の四大聖地のなかでも最上であること、仏教の原点（インド）に戻り、そこを起点として仏教と法華經の教えを広げ人々を救うこと、という3点が挙げられている。インド人スタッフによれば、5年前に職業訓練学校は閉鎖された。毎日曜日に実施されていた音楽の授業もなくなった。現在行われているのは、土日に村でホメオパシーの薬を配布することだという。筆者が訪れたのは2017年4月であったが、オフシーズンで宿泊所も閉館中であった。筆者が話をしたインド人スタッフは、インド人の仏教改宗は行っていないと説明した。

仏心寺建設の発起人の一人は、元日本寺駐在僧である。帰国前に、お礼としてボードガヤーの村人約3百人に食事をふるまった。十数年後、日本にいた彼のもとに、その食事会に参加した青年から突然電話があり、ボードガヤーの地元民と日本人の交流の場となるような寺院を建ててほしいと要望されたという。6人の僧侶が彼に賛同し、1997年12月15日に「お釈迦様の聖地に宿坊を作る会」が発足した。寄進者総数1,232名によって寺院が建立され、2000年12月31日に落慶法要が開催された。同寺院では、貧しい子供たちのために学校をひらき、ヒンディー語、英語、数学を教えている（写真7参照）。制服、教科書、文房具も支給する。また、巡礼者のために宿泊地を提供している。日本人僧が滞在しているが、筆者が訪れたときには不在で、話をしたインド人スタッフによると、宿泊者はほぼ外国人である。なお、インド人の仏教改宗は目的としていない。

クシーナガルには、曹洞宗峰仙寺（宮城県）の千葉住職が1999年に釈迦山白雲苑峰仙寺を建て、無料の施療院を開所したとの報道があった（文化時報1999/3/20）。千葉住職は、診療前には仏前で合掌させていると話し、「インドで少しずつ増えている仏教徒の心の拠り所」となることを願っていた。しかし患者が殺到し、住職の個人資産では間に合わなくなった。同報道によれば県知事に協力の約束をとりつけたとあるが、続報はなく、インターネット上でも

全く情報をみつけることができない。また、1992年に曹洞宗大宝寺の水野住職が設立したNGO「インドマイトリの会」は、2002年の時点でクシーナガルに23の学校を建設した。書籍や文具の寄贈も行っていった（朝日新聞（阪神版）2002/3/14）。2004年6月の強風で学校の校舎が倒壊した際には、修復費用を捻出できなかった。そこで、群馬県曹洞宗青年会が支援をしたという（仏教タイムス 2006/4/13）。比較的長く活動は続いたようであるが、2014年以降、ウェブサイトの更新はみられない。

最近報道されたのは、FK サンガ教育機構によるインド北東部シッキム州の州都ガントク郊外での学校建設である。同機構の代表は浄土真宗本願寺派浄運寺（福岡県春日市）の白山大慧前住職で、親鸞の教えに基づく仏教系の学校となる。本願寺派の開教拠点のないインドに対して、隣国ネパールの首都カトマンズには寺院が存在する。学校の建設されるヤンガン町は「カトマンズ本願寺」所長の出身地で、人口の70%が仏教徒である（仏教タイムス 2018/2/15）。1975年にひとつの州としてインドに編入されたシッキムは、原住民であるレプチャ人、17世紀に入ってきたチベット人に加え、19世紀にはネパール系諸



写真7 仏心寺内でひらかれている学校。夏休み中なので生徒が少ない。

民族が移住し多数派となった（応地 2012：345）。彼らは伝統的に仏教を信奉しており、第1節で紹介したアンベードカルを信奉する新仏教徒とは異なる。

むすび

本稿の目的は、日本の宗教団体がインドという条件下でどのような活動をしているかを概観し、特に21世紀以降に確認される変化を描くことであった。第1節で扱った新仏教徒と深くかかわる活動では、佐々井秀嶺、サンガラトナ・マナケ、ボーディ・ダンマともに、日本の仏教宗派から支援も受けながら、活動場所の状況にあわせて、個人的な判断に則って行動している。天台宗式の授戒会やボーディによる禅の布教が、アンベードカルの仏教を受け入れている新仏教徒たちにとってどれほど意味をもっているのか現段階では判断しかねるが、妙海山龍宮寺は、日本の日蓮宗側と地元の認識とのズレが見られた例であろう。しかし龍宮寺は同時に、観光地として多くの参拝者を獲得している。

第2節では、信者に改宗を要求しない教団として、創価学会、霊友会、幸福の科学などをまとめて扱ったが、富裕層・高学歴層に布教対象を絞っている創価学会に対して、霊友会と幸福の科学は經典類のインドの諸言語訳を用意している。インドでは教育・生活水準に大きな格差があり、宗教やカーストの違いも手伝って、各コミュニティは非常に閉鎖的である。幸福の科学の例で明らかに、一つの教団であっても、どの層に信者を獲得しているかによって活動形態が全く異ってくる。

第3節では、インドに「仏法を還し」、あるいは「恩返しをし」、人びとを救い、平和を実現するという目標を掲げて活動している団体を扱った。布教といっても信者数を増やすことを目的としていないのは興味深く、そうした団体が複数存在するのは仏教発祥の地であるインドでの活動の特徴かもしれない。

以上のようにインドで活動する日本の宗教団体を3つに分類して記述してきたが、この分類には当てはまらない各団体の共通点と相違点もある。本稿で概観した多くの団体が、教育や医療支援、災害時の救援活動などを行っているが、その形態は2つに大別できる。霊友会や日蓮正宗妙観講は、社会貢献活動の背景に布教の意図がみえる。幸福の科学は、創価学会の布教様式と同じ傾向をもつ大都市での布教に加えて、日本人信者が建設した無償の学校を後になって教

団が援助し、現在では学校を通した布教活動が行われている。ボーディ・ダンマの禅塾や、最後に挙げた本願寺派の学校は、仏教徒に対する仏教教育を意図して作られたものである。これらに対して、閉鎖されたものも含め、ボードガヤーやサールナート、クシーナガルでの日本の仏教の活動は、インド民衆とのかかわりとしては支援活動が中心で、信者獲得を全く目的としていない。天台宗のサンガラトナは、「支援が布教の方便になってはならない」と主張している。ただし、サンガラトナの活動拠点はナーゲプルであり、天台宗あるいはPMS側が条件を出しているわけではないが、結果的に孤児院や学校に入るのは仏教徒がほとんどである。

無料の教育・医療施設は未だに求められている状況もある。しかし全体的な傾向として、仏教聖地に建てられた支援施設は、閉鎖あるいは回数を減らして続けている。布教を目的とするならば支援活動の資金を教団側が提供するだろうが、支援対象が限定されていない無償の援助は続かなくなっている。「貧しい後進国インド」で「先進国日本」の宗教者が支援をするという構図は変わってきているといえるだろう。

参考文献

- 榎木美樹、2012、「インド南部の仏教徒運動における僧侶の役割—ボーディ・ダンマ僧侶の活動事例」、『現代インド研究』、第2号、131-152頁。
- 応地利明、2012、「シッキム」、辛島昇他編、『新版 南アジアを知る事典』、平凡社、345頁。
- 大川隆法監修、幸福の科学編、2011、『大川隆法 インド・ネパール 巡錫の軌跡』、幸福の科学出版。
- 佐々井秀嶺、2004、『『ブッダとそのダンマ』再刊によせて』、B・R・アンベードカル著、山際素男訳、『ブッダとそのダンマ』、光文社新書、405-430頁。
- 志賀浄邦、2010、「インド仏教復興運動の軌跡とその現況」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第25号、23-46頁。
- 外川昌彦、2015、「藤井日達の西天開教とマハトマ・ガンディーの植民地主義批判—近代日本仏教のアジア布教とインド」、『宗教と社会』学会、『宗教と社会』、第21号、1-15頁。
- 中島岳志、2005、「現代インドにおける宗教事情 序論」、『海外の宗教事情に関

する調査報告書』、文化庁。

林明、2008、「インドにおける日本山妙法寺：石谷上人・森田上人の思想・活動―藤井日達上人とガンディーの精神の継承」、弘前大学人文学部、『人文社会論叢 人文科学篇』、第20号、1-12頁。

Bharat Soka Gakkai, 2017, *Basics of Buddhism 2017*, New Delhi: Eternal Ganges Press Private Limited.

藤井日達著、山折哲雄、1972、『わが非暴力 藤井日達自伝』、春秋社。

マナケ、サンガラトナ・法天、2007、『波瀾万丈！インドの大地に仏教復興―日本の心をもつインド人仏教僧・奮闘記』、春秋社。

ムコパディヤーヤ、ランジャナ、2007、「中産階級の勃興とインド SGI」、日本宗教学会、『宗教研究』、81 巻 4 号、897-898 頁。

ムコパディヤーヤ、ランジャナ、2010、「藤井日達―『西天＜インド＞開教』の体験」、小川原正道編、『近代日本の仏教者：アジア体験と思想の変容』、慶應義塾大学出版会、370-407 頁。

山折哲雄、1973、「インド体験型アジア主義の一類型―藤井日達の場合」、アジア経済研究所、『アジア経済』、第14巻9号、2-19頁。

山際素男、2008、『破天 インド仏教徒の頂点に立つ日本人』、光文社新書。

注

- 1) 「ネオブuddhist（新仏教徒）」という呼称は、アンベードカルの追随者である仏教徒と、既存の仏教徒を区別するために使われてきた。前者は主にダリットで構成されており、この呼称に差別的な意味合いや異端とする意図をくみ取る当事者および研究者は、自ら／彼らを「新仏教徒」ではなくあえて「仏教徒」と呼ぶ。しかし、日本の伝統仏教や仏教系教団がインドのさまざまな層とかかわりあっている状況を記述する本稿においては、「アンベードカルの仏教の信奉者」を対象とする布教や支援は明らかに他のそれらと異なるため、論述のわかりやすさを優先し「新仏教徒」という呼称も使用することとする。
- 2) 日本山妙法寺のデリー道場は、ハリヤーナー州のトラストであったが、仏舎利塔を建設する前、日本からの送金先となることを可能にするためソサエティとして登録し直したという。
- 3) http://www.censusindia.gov.in/2011census/Religion_pca/RL-0000.xlsx
- 4) 「22の誓願」の内容は、例えば（志賀 2010：34）を参照のこと。
- 5) 佐々井がナーグブルに到着したばかりの頃の街の様子について、「仏教徒を名乗る人こ

そ多かったが、実際の宗教活動は皆無。寺院はもちろんなく、僧侶はゼロ、一卷の經典すらなかった」(神戸新聞 1987/11/29) といった説明は佐々井に関連する新聞報道や著作で繰り返されている。

- 6) 改宗は 10 月の記念大会にディークシャーブーミのみで行われるわけではなく、僧侶であれば時・場所に制約なく改宗式を行う資格をもつ。例えば佐々井は現在、自身の拠点であるインドラー寺院で毎日曜日に改宗式を開催している。こうした改宗式では、すべての参加者が別の宗教から仏教に改宗するわけではない。アンペードカルとともに改宗した者の子孫、すなわちすでに仏教徒である者たちが、進学や就職の際に必要な改宗の証明書を獲得するために参加する場合もある。
- 7) 佐々井が理想とする「仏教」のあり方やマハーボーディ寺院の管理権返還運動については、志賀浄邦が詳しくまとめている(志賀 2010:36-41)。佐々井の日本の「宗派仏教」批判は、『ブッタとそのダンマ』日本語訳の巻末に収録された佐々井による寄稿文にもうかがえる(佐々井 2004)。
- 8) 佐々井のもとで得度したナーガボーディが、当時宮本光研が住職であった長泉寺で 3 年間修行したとの報道があったが(山陽新聞(岡山) 1998/7/28)、続報は見当たらない。
- 9) インドで当初修行をした日本山妙法寺とも、佐々井はのちに決別した。1969 年、佐々井がナーグプルに最初に建てた寺は、「印度山妙法寺」を意図して「パーラティー・サッドダルマ・ヴィハール」と名づけられた。同寺院には現在、数年前から住んでいる尼僧がおり、彼女が朝晩の儀礼を行っている。寺院内には、佐々井がマハーボーディ寺院奪回運動の際に日本から取り寄せたという小さな仏像が安置されており、佐々井の写真も飾られている。しかし、寺院の中心にある大きな仏像はタイから贈られたものであり、日本山妙法寺の象徴ともいえる太鼓は一つもない。寺院の前の家の住人が「南無妙法蓮華經」と言ったので筆者が驚くと、「バンテー・ジー(仏僧の敬称。ここでは佐々井を指す)が私たちに教えたのはこれでしょう。いつからか太鼓はなくなってしまったけれど」と答えた。
- 10) 任用、初級、中級の 3 段階の試験がある。実施規模について「中外日報」は、2014 年に 103 都市 150 会場で実施された任用および初級試験で 1 万 9 千人の会員が受験し(中外日報 2014/10/3)、2016 年 7 月の中級試験では 74 都市で 5,666 人が受験したと伝えた(中外日報 2016/9/21)。
- 11) 『グラフ SGI』2013 年 3 月号は、BSG 会員の半数が青年であるとし、2012 年 3 月に BSG 青年部が全国 273 会場で支部総会を開催したことを伝えた(22-23 頁)。『グラフ SGI』2014 年 3 月号には以下のようにある。「インド創価学会の中で、名門・国立デリー大学で学ぶ学生部員は今、2 千人。インド工科大学、ネルー大学、タゴール国際大学など、全土で 5,500 人もの学生部の英才が学問に励み、将来のインドの力になる」(5 頁)。「インド学生部の躍進が目覚ましい。インド創価学会の約 1 割が学生部員。入会間もな

いメンバーが多く、紹介者が同世代であることも特徴だ」(6頁)。『グラフ SGI』2016年3月号は、「BSG は、この1年で世界広布新時代の象徴となった。全メンバーの半数は青年部」(3頁)とする。2017年8月11日付の「中外日報」は、7月23日に開催された「九州インド青年先駆総会」にインド青年部会員2百人を含む3千人の若者が出席したことに言及し、BSGが2017年に1ヶ月で青年部世代の友人10人の座談会参加や青年3人の入会を実現する取り組みを実施したことを伝えた。

- 12) <https://happy-science.jp/info/2011/27/>
- 13) 幸福の科学が参加したブックフェアの場所と時期は以下の通り。ニューデリー(2012年2月、2014年2、8月、2015年2、8月、2016年8月)、コルカタ(2012年1月、2014年1月、2015年1月)、ムンバイ(2013年11月)、チェンナイ(2014年1月、2015年1月、2016年6月)、プネー(マハーラーシュトラ州)(2014年11月)、バンガロール(2014年11、12月)、アフマダーバード(グジャラート州)(2015年5月、2016年5月)。
- 14) ウェブサイトの「海外ニュース」には、2014年4月8～11日に「未来館」で行われた「海外リトリート研修」の報告がある。10ヶ国から会員50人が参加した。4つの精舎(正心館、未来館、日光精舎、那須精舎)の巡礼も行われた(<https://happy-science.jp/info/2014/10602/>)。こうした海外会員を対象とした研修がどれくらいの頻度で、また現在でも行われているのかに関しては情報を得られなかった。
- 15) <https://happy-science.jp/info/2017/25380/>
- 16) <https://happy-science.jp/info/2012/1180/>
- 17) https://rk-world.org/news_archive_byyear.aspx?TypeID=3
- 18) <http://myokan-ko.net/especially/nepal.index.html>
- 19) 日本山妙法寺デリー道場では、手書きされたこの藤井の言葉が額に入れて飾られている。日付は昭和43年8月6日とあった。
- 20) 例えばムコパディヤーヤは、藤井がインド人信者をほとんど獲得できなかったことを理由として、「日達はインドで仏教を復興することに成功したとは言いがたい」と評している(ムコパディヤーヤ2010:403)。
- 21) 藤井が西天開教をはじめるまでのいきさつについては、(外川2015)に詳しい。
- 22) 山折によれば、初代インド首相ネールー、前大統領S・ラーダークリシュナン、ブーダーン(土地寄進)運動のヴィノーバーなど、独立後の会議派政権の指導者たちと藤井が知り合ったのはガンディーの宿舎においてである(山折1973:9-10)。
- 23) アンベードカルや新仏教徒に対する藤井の見解は、(藤井1972:248-251)を参照のこと。
- 24) ムコパディヤーヤによれば、「日本山では『藤井日達こそ、日本山である』とされているように、日達の言葉だけを残して、それにひたすら純粋に帰依し、実践的行為

に移ることが推奨されている。日本山の僧侶や信者が自分の信仰や活動について執筆したり、刊行したりすることは傲慢な行為として教団内で否定的にとらえられる傾向がある」(ムコパディヤーヤ 2010: 371)。

25) 次は、林明が記録した石谷上人のインタビューからの抜粋である。「現代インドで、仏教の教えを表面的に復興したり、仏教教団を作ったりすることは目的ではありません」(林 2008: 5)。「今日のインドでは、仏教への改宗は、真に仏の道に帰依してではなく、多くは政治絡みであり、ヒンドゥー教との争いから生まれています。私は、そのような人たちとは関わらないようにしています」(前掲書: 8)。

26) ラダックの仏舎利塔建設に尽力し、現在まで同仏舎利塔を管理している中村行明は、1977年に日本山で出家得度した。1996年にはニューデリーに世界仏教徒センター(World Buddhist Centre)を開設した。中村は現在、日本山とはかかわりをもっていない(仏教タイムス 2004/9/30)。

27) <https://www.ibba.jp/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E5%B1%B1%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%AF%BA/about-nihonji>